第２学年「図画工作」学習指導案　　**授業者**　小沼　律子

２月２１日（土）　２階アトリエ２　　１０：００～１０：４０（話し合い１１：００～１１：４５）

１　題材名　ひびきあうアトリエ　－ 間が立ち上がる －

（１） 題材について

本題材は、アトリエという学習環境そのものを題材の中心に据え、ひと・もの・こと・場など、様々な他者との関係の中で表現が立ち上がっていく過程に目を向ける。

前時（第２時）では、「ひびきあうアトリエ　－ ひらかれる －」として、子どもたちがアトリエという場に身を置き、材料に触れ、試し、友だちの行為や言葉に出会いながら、関係がひらかれていくことをねらいとした。授業では、置く・重ねる・つなぐといった行為を通して、形や配置、構造などが、少しずつ変化し、活動の途中で意味や見え方が更新されていく姿が見られることが予想される。そのような変化は、あらかじめ定められた形に沿って進むものではなく、材料の性質や場の広がり、他者の行為や言葉が折り重なる中で、次にどのように関わっていくか、ということがその都度立ち上がる。それに応答するかたちで、子どもたちの行為が過程の中で生じていくと考える。

子どもたちは、考え、選び、動いている主体でありながら、同時に材料や場、友だちとの関係によって考えを動かされ、気づいたときには表現の様相が変わっているという経験を重ねていく。

（２）本時の授業について

本時（第３時）では、そうした響き合いの中で生起してきた出来事や表現の変化を手がかりに、ひと・もの・こと・場などの様々な他者の「あいだ」に生まれていた関係に目を向ける。形や配置、構造を単なる結果として捉えるのではなく、どのような関わりの中でそれらが立ち上がってきたのかを確かめ直すことで、「間が立ち上がる」学びの時間として位置づける。

終末では、上からや横からなど、立つ位置や距離を変えて、自分たちの表現や場を見渡し、関係の中で立ち上がっていたものを仲間とともに受けとっていく。　これは、上田信行（同志社女子大学名誉教授・ネオミュージアム館長）がネオミュージアムの「メタフロア」において示す、行為の只中に身を置きながら視点をずらして場全体を捉え直す経験として位置づけていることを参考にしている。教師は、ひと・もの・こと・場など、様々な他者との関係の中で出来事として立ち上がってくる表現に身を置きながら、その変化に応答するように関わっていく。

また、完成した形や結果のみを見るのではなく、関係の中で表現がどのように揺れ動き、変化してきたのかという過程に目を向けていきたい。

３　学習指導計画（３時間目／全５時間）

① アトリエ２の材料や場に出会い、関わり始める。 …… １時間
② グループで置く・重ねる・つなぐ活動を通して表す。 …… ２時間（本時）
③ 表現の変化や出来事をふり返り、関係の中で生まれたものごとについて対話する。 …… ２時間

４　本時の学習について

（１）本時のねらい

様々な他者に応答し、関係の中で生じた表現や場の変容に気づく。

（２）予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
１　アトリエ２を見渡し、前時の場を捉え直す。 ２　前時までの場の変容を踏まえて、グループでどのように表していくか考える。 ３　グループごとにこれまでの行為やあらわれてきた物事に題名をつける。 ４　ふりかえる。	・前時に起こっていた事を丁寧にふり返る。 ・前時と同様に、起きていくことを大事にする。 ・これまでの行為や場の変容がどのようなものであったのかをふり返りながら題名をつける事を伝える。 ・ふり返りでは、本質に迫るような言葉を抽出し、次時の対話につなげる。

□授業後の話し合いで話題にしたいこと

アトリエという場で、どのようなことが起きていたのか。